

奈良井宿かわらばん No.1

奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

8月11日・12日 古式ゆかしく・・・

しずめじんじゃ

鎮神社の祭礼 夏祭り

鎮(しずめ)神社の夏祭りは、永い歴史を持つ奈良井宿をあげての祭礼です。毎年8月12日、本祭の昼すぎ、鎮神社で神囃子しんぼやしを奉納したあと、下町明友会めいゆう・獅子屋台、上町若連会わかれん・お道具・神輿けいしん、中町敬神会・御神馬と行列を組んだお練りが、通囃子とおりぼやしを演奏しながらゆっくりと宿を下って行きます。沿道の家々は、ミセを開けはらい、若衆に酒をつぎ、御馳走をふるまいます。酒の勢いでお囃子は、いっそう調子が上がってきます。

お練りの主役である若衆のお囃子は、笛・三味線・太鼓つづみ・鼓・大皮からなり、明友会、敬神会、若連会は、それぞれ微妙に違うお囃子を、代々守り伝えています。各町の氏神の前で奉納される神囃子は、ことに長くむずかしく、若衆は祭にそなえ十分な稽古を積んで本番に備えます。

獅子屋台はご祝儀をもらうたびに頭を振り、御祓いします。山側の家からご祝儀がでたときは「ヤマーッ」、川側の家からのときは「カワーッ」という掛け声がかかり、それにあわせて獅子が頭をあげます。お練りはゆっくりゆっくりと進み、下町にお神輿がさしかかる頃には夕暮れをむかえ、家々の軒の提灯に明かりが灯ります。



まつりのご馳走

巻きずしいなりや稲荷ずしをつくる。巻きずしには、干瓢かんびょうやズイキの煮たもの・人参の味噌づけきゅうり・胡瓜をいれる。赤飯を蒸し、お櫃ひつにいれて「ミセ」におき、人々に振る舞った。魚は干鰯たらや鰯にしんの旨煮である。干鰯は流水に三日ほど浸しておき、身がやわらかくなったものを甘じょっぱく煮る。鰯はミガキ鰯である。米のとぎ汁に二日ほどつけたものをおなじように煮付ける。祭のころは夕顔がとれ、夕顔で刺身をつくった。トキガラシをかけるが、トキガラシは、粉ガラシを茶で溶いて醤油を加えてつくりま



奈良井宿かわらばん

奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

「そば」にまつわるふたつのお話し

そば切り発祥の地「本山宿」

森川許六(きょろく)編の俳文集「風俗文選(もんぜん)」(宝永3年・1706)収録する雲鈴作^{うんれい}「蕎麦切ノ頌(しょう)」の書き出しに「蕎麦切といっぱ(いうのは)もと信濃国本山宿(塩尻市)より出て、あまねく国々にもてはやされける」とあります。また、国学者の天野信景(さだかげ)が書いた雑録「塩尻」の宝永年間のところに、甲州の天目山(山梨県甲州市にある臨濟宗棲雲寺^{せいうん}の山号)から始まったという記述があります。ところが、正保2年(1645)版「毛吹草」は信濃国名物としてそば切りを挙げて、「当国より始ると云(いう)」と注しているが、本山宿には触れていない。こうして見ると信濃説に分があるが、伝聞の域を出ず確証はありません。 参考文献:新島繁著「蕎麦の世界」

食べ方の最古の記述は、「贅川宿」

食べ方の記述がある最古の文書は「山中日録」という旅行記で、尾張藩主 徳川義直に儒学者として仕えた堀杏庵が、寛永13年(1636)4月に日光東照宮の造営完成の式典に参列する義直に同行し、中山道を旅したときに書かれたものです。

それによると、「榎井(奈良井)を通過し贅川宿に着いた。その夜、義直侯は蕎麦切りを召



し上がり、自分たちも相伴に預かった。それは冷やしそうめんのように、大根の絞り汁にたれ味噌を少々加え味を整え、鰹節^{かつおぶし}の粉や葱(ねぎ)やニラを薬味として添え、その汁で食べるものである。それは、大いに美味だったので、おいに食べたが、中にはあまりのおいしさに誘われ、数十碗も食べた者もいた程だった。」とあります。

木曾漆器祭・奈良井宿場祭

期 日 例年 6月第1金曜日～日曜日の3日間

主なイベント 漆器市(3日間・榎川地区全域)

お茶壺道中(最終日の・奈良井宿場内)

※ 詳細は、塩尻市榎川支所 振興課へお問い合わせください。(電話 0264-34-2001)

奈良井宿かわらばん

奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

今も息づく奈良井宿の「屋号（やごう）」

奈良井の宿場を散策すると、各家の玄関上の木札が目につきます。ここ奈良井宿では、今でも屋号を使う機会が多くあります。

日本における屋号は、江戸の昔、身分制度により武士以外は苗字を名乗ることができなかったため、屋号をつけるようになったといわれています。

屋号の代表は、歌舞伎の世界や現在のデパートをはじめとした商業界にみることができます。歌舞伎では、音羽屋（おとわや）・高麗屋（こうらいや）、デパートでは、高島屋・松坂屋・松屋、商業会では、紀伊国屋・加賀屋など多くの屋号が使われています。

奈良井宿では、越後屋・伊勢屋・松坂屋・油屋・門屋・枡屋（ますや）など、その当時の出身地や職業などによってつけられたものと思われます。

また、屋号のなかった家でも、現在の職業や苗字、分家したことから床屋・髪結屋・丸吉・新伊勢屋など、新しくつくられたものもあり家々の歴史がうかがえます。

屋号を見ながら歩くのも楽しいものです。



・・・お願いします・・・

木曾の大橋と宿場の往来には、JR 線路横断は大変危険ですので、指定の踏み切りと地下道をお通りください。

奈良井宿かわらばん

奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

八幡神社・杉並木・二百地蔵

町並み周辺のみどころ(その1)

八幡神社は、JR 奈良井駅から坂を50メートルほど上がったところにあります。

長い石段を登ると、向かって右に本殿が、左に舞屋まいやが向かいあって建っています。

八幡神社は誉田別尊ほんだわけのみこと（応神天皇）おうじん注を祭神とする下町200戸余りの氏神で、奈良井ならい義高よしたかの居館うしとらの丑寅うしとらの方向(北東)にあたり、鬼門除けの守護神として崇拝されたと伝えられています。

本殿は江戸時代末に建築された一間社流造りで、拝殿のなかに収められています。



旅人に憩いを与えた杉並木

舞屋もやはり江戸時代末に建築されたもので、正面から見ると三角形の屋根に、彫刻をほどこした大きな梁が渡されています。内部には中央に回り舞台があつて、以前はお祭りなどのとき芸能がおこなわれていたそうですが、現在は春祭などの休憩所や集会所として使われています。

八幡宮の石段の途中から右に折れる杉並木の道があります。道の両側に並ぶ十数本の杉の巨木は、この道が中山道であった当時からのものです。



整然と並ぶおよそ二百体の石仏。
風説にさらされた素朴で豊かな表情は心を和ませてくれます。



さらにこの道を進むと、左手に小さなほこら祠とともに多数の石仏がまつられています。二百体の苔むした地藏さまが並んでいます。地藏よりも観音像が多くまつられています。これらは鉄道敷設工事の折りに周辺

から集められたものです。正確に数えると百九十四体あります。祈るあり、笑うあり、怒るあり。人知るや知らずや、地にどっかと座って地域の発展と安全を祈っています。

注 ほんだ わけのみこと おう じん てんのう
誉田別尊(応神天皇)

五世紀前後ころの第十五代天皇。十四代天皇ちゅうあい仲哀天皇の第四皇子で、母は神じん功皇后。大分県宇佐市の宇佐神宮(宇佐八幡宮)を本源とする。

武家の守護神であり、武神で、軍神である。(名古屋 片山八幡神社 HP より)

奈良井宿かわらばん

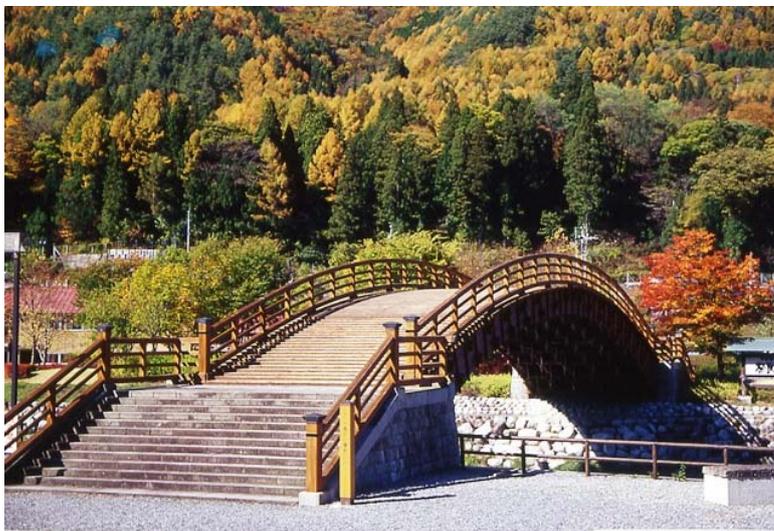
奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

・ ・ 木曾の大橋 ・ ・

平成にかける夢 つなぐ技

奈良井川はその源を、中央アルプスの木曾駒ヶ岳にもとめ、^{せいれつ}清冽な流れを今もとどめています。奈良井宿のほぼ中央の裏手にあるあたりに、木の橋がかかっています。橋の名称は『木曾の大橋』と高欄親柱こうらんおやばしらに刻まれています。奈良井川の清冽さが直線的であることに対して、この橋は曲線をモチーフとしたアーチ橋です。直線と曲線の織りなすハーモニーが、なぜか瀬音に調和しています。橋の材は木曾檜。手でふれた感触が、優しさをもっています。

この『木曾の大橋』は、左岸(JR 側)の階段が20段、右岸(国道側)が21段と、



二十世紀から二十一世紀へ願いをつなぐ夢のかけ橋となっています。

夜は、ライトアップされ昼間とまた違った姿を奈良井川に映し出します。

■ライトアップ時間
夕暮れから夜 9 時頃までです。

橋の概要 長さ：33m 巾：6.5m 水面から7m
総事業費：199,511千円
工事期間：平成元年12月16日～3年3月25日

・ ・ ・ お願いします ・ ・ ・

木曾の大橋と宿場の往来には、JR 線路横断は大変危険ですので、指定の踏み切りと地下道をお通りください。

奈良井宿かわらばん

奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

奈良井宿が「美しい日本の歴史的風土100選」に選定



重要伝統的建造物群保存地区の奈良井宿が、「美しい日本の歴史的風土100選」に選定されました。地元の熱心な町並み保存活動と地域資源を生かしたまちづくりがまた一つ実を結ぶこととなりました。

選定目的

古都保存法施行40周年を記念し、歴史的風土の保存と継承、観光立国、風格ある美しい活力に満ちた地域社会の実現等に資するため。

選定基準

全国700件近くの推薦の中から、「歴史的意義」「一体性」「集積・広がり」「保全活動」「永続性」の観点で選定。奈良井宿は、多くの旅人が往来した中山道の宿場町として、今なお江戸の面影を残しているとして選定されました。

選定者

「美しい日本の歴史的風土100選」実行委員会(事務局:[財団法人古都保存財団](#))

木曾漆器祭・奈良井宿場祭

期 日 例年 6月第1金曜日～日曜日の3日間

主なイベント 漆器市(3日間・榑川地区全域)

お茶壺道中(最終日の日曜日・奈良井宿場内)

※ 詳細は、塩尻市榑川支所 振興課へお問い合わせください。(電話 0264-34-2001)

奈良井宿かわらばん

奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

鳥居峠物語

塩尻市奈良井と木曾郡木祖村の境に位置する「鳥居峠」は、古くは吉蘇路の峠坂、中世にはならい坂、藪原坂と呼ばれていました。標高1197m、峠山は1416mあり、旧中山道の難所として旅人を苦しめていました。

中世には尾張と信濃の境ということもあり、戦いが何度もありました。木曾義昌と武田勝頼(武田信玄の四男、甲斐武田氏最後の当主)の戦いで多くの兵士を埋葬したという、葬沢があります。

峠の名の由来は、木曾義元が御嶽山に戦勝を祈って峠に鳥居を建てて以来、「鳥居峠」と呼ばれるようになったといわれています。

また、この峠は奈良井川(日本海側)と木曾川(太平洋側)の中央分水嶺となっています。



写真:遊歩道石畳(奈良井側)

参考:フリー百科「ウイキベディア」

小説の舞台にも...

真田十勇士の1人猿飛佐助は、この峠の麓に住む鷲尾佐太夫という郷士の息子として生まれ、忍術の修行を積んだと戦前の「立川文庫」で紹介され、人気を得ました。この佐助を題材として、サスケなどとして、白井三平などの漫画により現在でも親しまれています。また、鳥居峠で茶屋を営んでいた市九郎とおろは、表の顔は夫婦であるが、その裏では人斬り強盗を生業とし、後に減罪のため現在の大分県にある青の洞門を開削したという小説、菊池寛の「恩讐の彼方に」の中にも描かれています。

現在、これらの舞台となっている峠は、信濃路自然遊歩道(昭和46年指定)として整備され、多くの人を訪れています。

奈良井宿かわらばん

奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

奈良井宿の公的情報の中心

高札場

高札場は、江戸時代に幕府や藩が定めた法律などを、人々に周知徹底させる目的で、^{おきて じょうもく きんせい}掟・条目・禁制などを書いた板(高札)を掲げていた場所です。宿場町の高札場には、特に宿継ぎ^{だちん}の駄賃を定めた高札なども掲げられ、また、宿



場間の距離をはかる基点となっていました。

奈良井宿の高札場は、京方の入口にあたる場所におかれ、明治の初めまで使われていましたが、そののち街道の廃止にともなって撤廃されました。現在の高札場は、当時の絵図(『町

方明細図』貞享3年 1686年)にもとづいて昭和48年に復元されました。

当時の高札場の位置

絵図(町方明細図)には往還の山側で、鎮神社と町との間にその姿が描かれています。そして、鎮神社と高札場の間に『沢(宮の沢)より御高札まで十八間(約 32m)』、高札場と町との間に『御高札より町迄式拾間(36m)』とあって、その位置を示しています。

現在の高札場は復元されてほぼ旧位置に立っていますが、もとの位置は現状の位置よりやや江戸側にあつたと考えられます。

参考文献: 楢川ブックレット11・町並調査報告書 木曾奈良井

奈良井宿かわらばん

奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

ぬりぐし
塗櫛

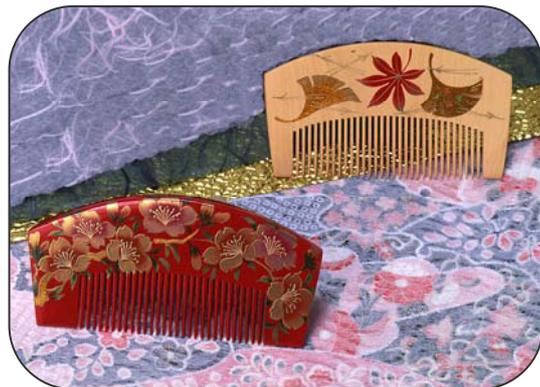


かつて隆盛を誇った宿場情緒を今に伝える「塗櫛」。

奈良井宿の木櫛の歴史は大変古く、江戸時代初期に始まり、木曾の「お六櫛」は全国的に有名です。寛政年間、中村屋^{けいさち}恵吉がこの木櫛に漆を塗り、中山道を通る旅人に大変もてはやされ、その後、吉野屋^{まきえ}洛兵衛が苦心して蒔絵を付け奈良井宿の産業として成立させました。塗櫛は、江戸や京の都へ出荷され今も「江戸積ぬり櫛問屋〇〇」という支派な金看板が残っています。

大正時代にはいると、奈良井で木地、塗りを施し、東京でつまみ細工をして仕上げました。これが、島崎藤村の「初恋」で知られる「花櫛」^{はなぐし}ですが、大正末期にはすっかり姿を消してしまいました。

その後、昭和42年ころから塗櫛を復活させ、現在でもつくり続けられています。



江戸時代初期から今まで350年余りも続いた、木曾のお六櫛は、その永きに渡る歴史において数々の工夫技法が凝らされ、今日の美しい姿へ変化してきました。

「お六櫛 つくる夜なべや 月もよく」 — 山口青邨^{せいそん} —

楢川歴史民俗資料館横に建つ句碑。月夜の晩に櫛つくりの夜業を見て詠んだという句が刻まれています。

山口青邨(やまぐち せいそん、1892年5月10日～1988年12月15日)は、日本の俳人・鉾山学者。本名は山口吉朗(きちろう)。

参考文献:楢川ガイドブック・アルファベットでみる楢川より

ご存知ですか。

ろく ぐし
お 六 櫛

木曾のお六櫛は、有名な名産品となっているが、“お六櫛”には、こんな伝承がある。江戸時代にお六という娘が妻籠宿に住んでいたが、不幸にもお六は、生まれつきの頭痛持ちで、日夜御嶽神社に百日の願がんをかけていた。その満願の百日目の夜、御嶽大権現がお六の夢枕に立ち、「地元産のミネバリの木で、櫛を作って髪をすくと、たちどころに頭痛がいえるだろう」というお告げがあった。

お六は、よろこび、早速ミネバリの木で木櫛を作って用いたところ、不思議にも難病の頭の病気が全快した。そこでお六は、自分と同じ病気で悩む女性のために役立てたいと、願いをこめて一心に御嶽大権現への感謝を込めて木櫛を作った。

そのことが妻籠宿の宿場中に口伝えて、広まり、霊駿あらたかな木櫛、頭痛の治る木櫛、この櫛で髪をすくと頭が良くなると評判になり、中山道を通行する旅人たちが女房や女性のためのみやげ物として、飛ぶように売れ、妻籠宿の名産品となり、その櫛をいつの間にか、「お六櫛」と呼ぶようになった。

このミネバリの木は、カバ科に属す落葉喬木で、別名オノオレ・オノオレカンバとかアズサという高冷地特産樹木で、五月頃黄褐色の花が咲く。名のごとく斧が折れるほど堅くて、ねばりがあり、木の目が美しいのが特徴である。

参考文献:「かわら版歴史の道中山道」より

奈良井宿かわらばん

奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

かずのみや

皇女和宮

中山道は將軍家に嫁ぐ姫宮たちの大通行に使われたため、「姫街道」と呼ばれました。なかでも幕末の公武合体策のため、14代將軍・徳川家茂いえもちに嫁いだ和宮の大行列は、絵巻物のような豪華さだったようです。しかし華やかさの裏には、姫宮たちの悲しい思いも秘められていたようです。

幕末皇女和宮降嫁こうかの行列は文久元年(1861)京都を出発し、中山道を江戸にくだりました。木曾路通行は4日間で、和宮は11月2日に上松宿あげまつで泊まり、3日に福島宿ふくしまで昼食をとり、宮越宿みやのこで小休憩、藪原宿やぶはらで泊まり、4日は奈良井宿で小休憩、贅川宿にえかわで昼食をして木曾谷を通過して本山宿もとやまで泊まるという日程でありました。この通行に際して、木曾十一宿を三継ぎで、一継ぎに延べ人足が22,587人、伝馬が延べ669足(馬籠宿継ぎ立て人馬)が動員されました。通行の準備もまた大掛かりなもので8月から道路の改修が命じられ、道から6尺(約1.81m)の幅で藪を刈りあげ、さらに道から2間目から3間目(1間は6尺)にある木の枝で街道にのびている分は切りとる(日傘の邪魔にならないため)、道や橋で危険な箇所は入念に修繕する。街道筋から見える墓所・雪隠(トイレ)などの不浄のものは青葉で隠すことなどが命じられました。また、通行直前には沿道の石を取り除き、蒲鉾状に砂を入れるなどの整備が命じられました。その砂も「色合い格別白き方」にて、「こまかな砂にては雨天の筋収まり候に付きよろしからず、左候とて小石これ有り候てもよろしからず候に付き、とおし(ふるい)にかけ」て、「御通行の前夜往来しずまり候時分見計ら」って蒔くようにという入念な指示でありました。

また、通行の当日は、「御道中御用向きに相拘り候者の外は人払い」すること、鳴り物・鉄砲・野火・放馬の禁止を命じられ、沿道の家から通行を見ることが、物陰からのぞくことも禁じられました。



肖像画(ウィキペディアより)

(裏面につづく)

このような細かな指示や嚴重な達しは、和宮であるから特別だというわけではありませんでした。それまでも姫君の降嫁にさいいての通行では大同小異でありました。しかし和宮のばあいの例外は、通行の行列にたいして、また休憩場や宿泊所の宿場の警備が嚴重であったことで、尾張藩は鶴沼宿(岐阜県各務原市)から贅川宿までの各宿場の警備と、行列の警備を鶴沼宿から本山宿まで担当しました。公武合体に反対する攘夷派の襲撃を警戒して、よりきびしい警備体制が敷かれたのでしよう。

参考文献:旧樞川村誌第三卷「近世」より抜粋

みやこ(急ぐ) (東路)
すみれなし 都路出て今日幾日 いそぐもつらきあつまちの旅

和宮が美濃の呂久川(現・揖斐川)を渡るとき、土地の豪族真淵某が紅葉一枚を差し出した。
(急)

落ちて行く 身と知りながら紅葉はの 人をつかくこかれこそすれ

道は続く、

(何処)
宿りする 里はいつこそ峯越えて ゆけともふかき木曾の山みち

和宮は、辛さ心細さに耐えながら人々を懐かしみ、風邪にも耐えて、しかし心は決まっていた。

惜しまじな 君と民とのためならば 身は武蔵野の露と消ゆとも

この歌は降嫁を決心したときの述懐として伝えられていたが、近年は文久三年(1863)春の將軍家茂上洛中に詠んだと推定されるようになった。何時、何処で詠んだとしても、天皇と人民のために、いやお国のために東路を下ろうとした和宮の決心に変わりはない。和宮は夷人を怖れ、一途に攘夷を願ったが、お国のために尽くす親子内親王でありたかつたのであろう。

「日本歴史街道」が推奨されるなか、街道めぐりが盛んになって、中山道では和宮が偲ばれている。

和宮は、落ちていく身を悲しむだけの宮でなく、また、皇国史観によつたお国のために死を潔しとする宮でもなく、幕末という時代に雲居に育ち、幼少ながら天皇家、朝廷のあり様を身をもって知り、自分が国の存在に関わる任務をもっていることを認識していき、国の民を慈しむことを学んできた和宮であったと考える。

参考文献:ミネルヴァ書房 辻ミチ子著「和宮」より抜粋